

大人数グループワーク科目は初年次生に何をもたらすか？

－初年次教育とキャリア教育の両立を目指す試み－

小樽商科大学 教育開発センター

辻 義人

大学生活、さらには社会生活で求められるリテラシーとはどのようなものだろうか。小樽商科大学では、初年次生を対象とした正課科目「社会科学と職業」が開講され、特にキャリア教育の態度面を重視した教育活動が行われている。本科目の特徴として、①初年次教育とキャリア教育とが両立した科目であること、②300人以上の大人数でグループワークを実践していること、③心理尺度を用いた教育効果の測定を行っていること、これらが挙げられる。本稿では、本科目の取組み内容と、大学におけるリテラシー教育のあり方について紹介し提言を行う。

1. 正課科目「社会科学と職業」とは

小樽商科大学（以下、本学）では、初年次生を対象としたキャリア教育科目「社会科学と職業」が開講されている。まず、「社会科学と職業」は、どのような理念とカリキュラムに基づき開講されているのだろうか。本学の教育カリキュラムは、くさび型カリキュラムに分類される。これは、大学入学直後に教養科目や外国語科目などを学び、学年の進行に伴って専門性が高まる学習体系である。同様の学習体系は他大学においても広く採用されているものであり、さほど特筆すべき点はない。ここで、各学年の学習内容に注目すると、初年次生を対象とした特色的な教育プログラムが設定されている。初年次生を対象に「大学における学び」を学ぶための科目群「知の基礎系」である。「知の基礎系」は、以下の5科目から構成される。各科目の内容を、それぞれ以下に紹介する（図1）。①小樽学（小樽に関する理解と愛校心を育成する）、②社会科学と職業（社会人となることを前提に豊かな大学生活を考える）、③エバーグリーン講座（社会で活躍する卒業生を招き講演を聴く）、④基礎ゼミナール（少人数ゼミで基礎的な学習スキルを学ぶ）、⑤基礎数学（大学での学びに必要な数学的知識を学ぶ）。これらの科目履修を通して、学生は「大学における学び」の基礎を習得することが可能である。なお、これらの科目履修は卒業所要条件にも含まれており、卒業に際しては3科目以上、すなわち6単位以上の単位取得が必要となる。

もっとも特徴的な科目として、「社会科学と職業」が挙げられる。本科目では、初年次教育とキャリア教育の両立、大人数科目でのグループワーク実践、心理尺度を用いた教育効果の測定が行われている。本科

知の基礎系を構成する5科目を通して
初年次学生は「大学での学び」を学ぶ。

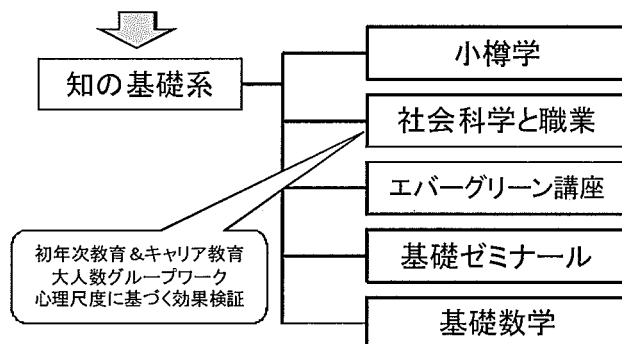


図1 初年次科目「知の基礎系」の構成

目の目的は、「4年後には社会人となることを前提に、有意義な大学生活の過ごし方を考えること」である。これは、キャリア教育における態度・関心面の育成であるといえるだろう。近年、多くの教育機関においてキャリア教育が実践され、多くの報告が寄せられている。しかし、それらの多くは、キャリア教育の知識・技能面に注目していることが多く、資格取得講座やビジネスマナー講座などの実践例が大半を占める。この点に関して、本科目では「社会人になることや働くことの意味」に注目し、キャリア活動に関する態度・関心面に注目した特徴的な教育活動を実施しているといえる。なお、キャリア教育の実践に際して、知識・技能面における教育と態度・関心面における教育は相互補完的であり、車の両輪に例えることができるだろう。職業観や勤労観のないところに有意義な就職活動は不可能であり、一方では、就職に要する知識や技能が欠けたままでは職業観や勤労観の育成が困難である。キャリア教育の実践にあたっては、知識・技能面と態度・関心面の両面からの教育が必要であろう。

2. 「社会科学と職業」の実践事例

300人を超える大規模科目において、グループワークを中心とした教育活動を行うためには、どのような授業運営が必要となるのだろうか。本科目の運営に際しては、6~7名の教員チームが担当している。教員チームは、主に本学のキャリア教育に携わっているメンバーから構成される。なお、複数教員が科目を担当するにあたり、リーダーや授業運営、学習内容の解説など、それぞれの役割が緩やかに決定されている。また、本学教員に加えて、数回の講義を外部講師に委託しているが、その際、本科目の目的や基本的な授業運営方法など、事前に十分な協議を行い、共通理解を試みている。このことにより、科目全体としての整合性が保たれている。

講義初回におけるオリエンテーションでは、学生に対して科目の目的や内容について十分な周知を行う必要がある。本科目は他の座学の講義と大きく異なり、5~6名でのディスカッションを主に行い、グループは数回で入れ替わる。特に、これらの点について、学生の十分な理解を得ることが重要であろう。また、その後の講義においても、授業運営に関する十分な配慮やアナウンスが求められる。グループを変更する場合や、自分自身の所属グループを忘れてしまった学生への対処など、事前に協議された内容については、決定された方針に基づき対処することが可能である。しかし、十数回の講義の中では、予想していないトラブルが発生することがある。このような場合には、教員同士で協議を行い、不平等の発生しないように調整を行っている。

学習活動は、主に教科書（小樽商科大学キャリア教育開発チーム，2008）を用いたグループディスカッションを行う。教科書では、大学生活に関する「正答のない問題」が記載されている。各グループは、それに基づいたディスカッションを行い、共通の結論を導き出すことが目的である。学生がディスカッションをしている間、教員は机間巡視を行い各グループに支援を行う。

本講義の評価は、出席、プレゼンテーション、レポート課題の総合評価に基づく。出席については、毎回必ず出席確認用紙を配布し回収している。プレゼンテーションについては、ディスカッションの結果を自発的に発表したグループに加点するものである。なお、自発的な発表がなかった場合には、教員がランダムにグループを指名して発表させ、この場合も加点の対象とした。また、レポート課題については、ディスカッションに関する内容をまとめたものを評定対象とした。

3. 本科目の教育効果

あらゆる教育活動は、教育目標に基づき行われる。本科目「社会科学と職業」における教育目標は以下の3点である。それぞれの目的と達成状況を記載する。

(1) **初年次教育とキャリア教育の両立**：現在、全国的に初年次教育に対する注目度が高まっている。これは、大学での学びは高校とは大きく異なっていることを自覚させ、スムーズに大学への学びに導入させることを目的としている。本学においても、初年次生のみを対象とした初年次科目が設定されており、初年次生の「自ら課題を発見する能力」と「強調して課題に取り組む能力」を育成することを目的とした教育活動が行われている。また、これは明確にシラバスに記載されたものではないが、初年次生どうしの横の繋がりを形成することも、本科目の目的の一つと位置づけられる。

次に、キャリア教育としての意義としては、以下の2点が挙げられる。第一に、本科目では、社会人になることを前提に大学生活をどのように過ごすかを考えさせている点である。これは、知識や技能の側面ではなく、学生の態度・関心面に重点を置いたキャリア教育と位置づけることができる。本学のキャリア教育では、従来のキャリア教育（知識や技能の獲得）と、就業に対する意識の育成とを同時に実践しているものといえるだろう。第二に、他者との交流を重視している点である。自分自身を理解しようとする際には、他者からの視点や評価が有効な手がかりとなる。ここで、将来的に就職活動を行う共通の立場から自己と他者とを比較し、自分自身の適性や興味・関心を推測することが可能となるのである。このように、本科目では、初年次教育とキャリア教育が両立した実践が行われている。

(2) **大人数グループワークによる社交性の獲得**：本科目は、例年300人以上が履修する大規模科目である。大学教育に関する報告において、グループワークは珍しいものではない。しかし、それらのほとんどは数名から数十名を対象とした実践であり、数百名を対象とした取組みはほとんど紹介されていない。一般的に、履修者の人数が増加するほど、教員の負担が増加する一方で、学生の満足度は低下することが予想される。グループワークの実践は、極めて困難であるといえるだろう。このような、困難な状況においてもグループワークを実践している理由として、多様な価値観を持つ学生の相互交流が促進されることが挙げられる。本科目において、グループ編成はランダムで行われる。そのため、ほとんどの学生が初対面である。このとき、課題が与えられることによって、ほとんど知らない他者同士が協調して共同で課題に取り組まざるを得ない状況となる。この課題を通して、多様な価値観を持つ学生同士でのディスカッションが可能となるのである。また、学生の多様な価値観に関して、他者との交流を通じた自己への気づきが可能となることも、キャリア教育の観点から重要な教育効果であるといえるだろう。

(3) **心理尺度を用いた教育効果の測定**：教育効果を測定することは、学生の理解度や興味・関心のフィードバックを得るために必要不可欠な取組みである。本科目では、複数の心理尺度を用いて、初回と最終回の教育効果の測定を行っている。なお、教育効果の測定は教育成果の向上を意図して行われたものであり、次の教育活動への示唆が得られる点において、教育活動の目的と位置づけられる。

心理尺度を用いたアンケートを実施するにあたり、①進路選択に関する自己効力感尺度（就職活動に対する自信の程度）、②自尊心尺度（学生の自分自身に対する評価）、③社会的スキル尺度（対人関係を円滑に進める能力）、これらの3要素に注目した。これらは、いずれも本科目に関連すると思われる能力・特性と考えられる。調査は、講義の初回と最終回に15分の時間で実施した。2010年度のアンケート結果の結果より、以下の3点が示された。

- ①進路選択に関する自己効力感尺度：素点にて上昇が見られたが、統計的に有意差なし
- ②自尊心尺度：素点にて上昇が見られたが、統計的に有意差なし
- ③社会的スキル尺度：社会的スキルの有意な上昇が見られた

この結果より、本科目を履修した学生の社会的スキルが上昇していることが示された。それ以外の2項目については、統計的に有意な差は認められなかったものの、素点としては上昇していることが示された。ただし、この結果は、本科目の履修が社会的スキルの向上に直結していることを示すものではない。学生は他の科目履修はもちろん、サークルやアルバイトなど、多様な活動に携わっているためである。いずれに

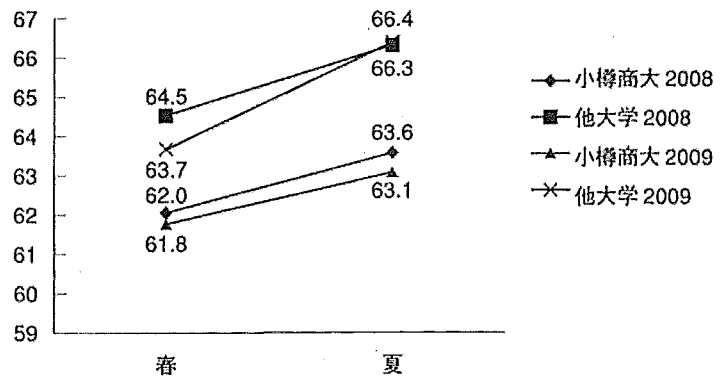


図2 社会的スキルの大学間比較結果 (2008, 2009年度)

しても、本学の初年次生の社交性は、4月から7月にかけて高まっていることが伺える。ここで、社会的スキルの育成に関して、2008年度と2009年度にも、他大学の初年次生との比較調査を行っている(図2)。この結果は、初年次生は春から夏にかけて社会的スキルが上昇していること、また、大学ごとに学生の成長の度合いが多少異なることを示している。このことから、それぞれの背景に合わせた初年次教育や、キャリア教育のプログラムを構築する必要があるものと考えられる。

4. 本稿のまとめ

本学正課科目「社会科学と職業」は、初年次生を対象としたキャリア教育科目である。その特徴として、大人数を対象としたグループワークが行われていることが挙げられる。大人数科目でグループワークを実践するには、多くの手間と準備、そして複数教員の配置が必要である。期待される教育効果として、今後の社会生活において求められる社会性の獲得と、多様な背景を持つ学生相互の交流を通じた自己への気づきが挙げられる。実際に心理尺度による調査を実施したところ、初年次生の社交性が上昇していることが示された。

本科目における取組みは、グループでの活動を通して、大学における学びへの導入と、社会人となることを前提とした大学生活のあり方について考えさせるものであった。この「チームを組み、学び続ける姿勢」は、大学生活のみならず、その後の社会人としての生活においても必要な資質である。初年次教育やキャリア教育を実践する際には、その知識や技能の側面だけではなく、態度や関心の側面にも注意する必要があるのではないだろうか。本学では、今後とも多様な観点から教育活動の調査・分析を実施し、「チームを組み、学び続ける姿勢」を育成する取組みを継続する予定である。

参考文献

小樽商科大学キャリア教育開発チーム (2008) 大学ノムコウ 自分と仕事を考えるヒント, キャリアバンク (編), 日本経済評論社